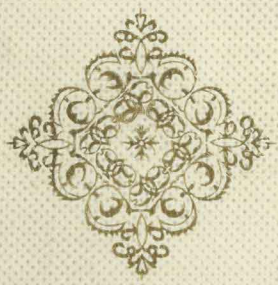


A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

8

ネルヴ

火の娘
オーレリ

ボードレール

悪の華 抄　　阿部良雄訳
パリの憂鬱　　菅野昭正訳

中央公論社

新集 世界の文学 8 ©1970

ネルヴァル
ボードレール

訳者 入沢康夫
稲生永
阿部良雄
菅野昭正

昭和45年4月25日初版印刷
昭和45年5月5日初版発行

発行者 山越豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

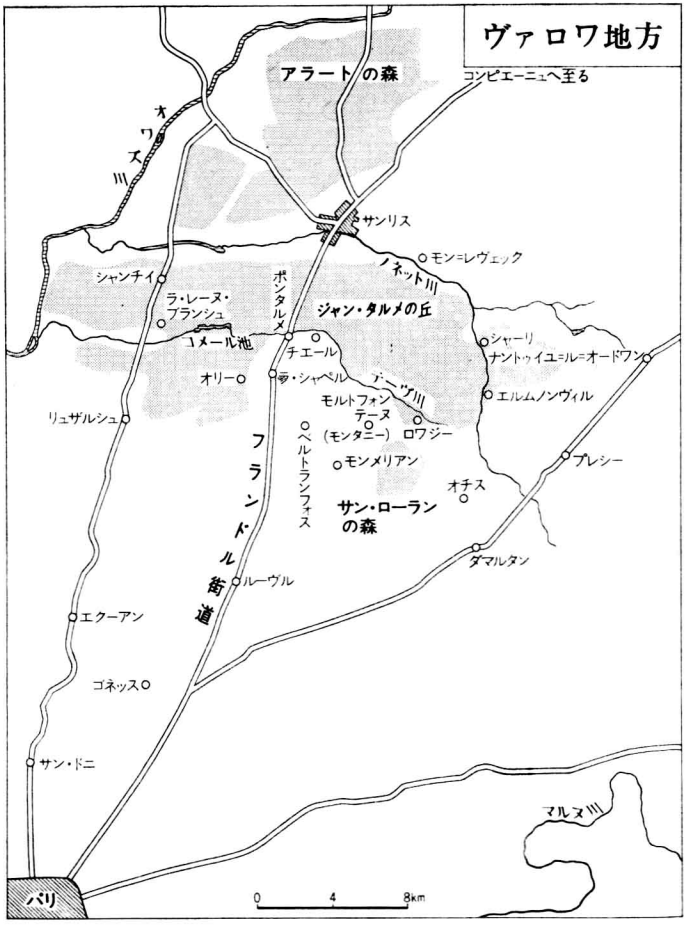
東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

ネルヴァル
火の娘 3
オーレリア 207
ボードレール
悪の華抄 287
パリの憂鬱 443
解説 543
年譜 577

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongl

火の娘


ヴァロワ地方
アラートの森
コンピエーニュへ至る
オワズ川
サンリス
モン＝レヴェック
ノネット川
シャンティ
ラ・レーヌ・フランシュ
ポンタルメ
ジャン・タルメの丘
メール池
チエール
シャーリ
ナントゥイユ＝ル＝オードワン
オリー
ヴ・シャペル
ブーヴ川
エルムノンヴィル
モルトフォンテーヌ
(モンタニー)
ロワジー
リュザルシュ
フランドル街道
ベルトランフォス
モンメリアン
プレシー
オチス
サン・ローランの森
ダマルタン
ルーヴル
エクーアン
ゴネッス
サン・ドニ
マルヌ川
パリ
0
4
8km

アレクサンドル・デュマへ

かつてジュール・ジャナン（批評家。『ジュルナール・デ・デバ』紙の劇評を担当していた）に『ローレライ』を献げましたように、親愛なる師よ、あなたにこの本を献げます。彼には、あなたにと同じ名目で、謝意を表さねばならなかったのでした。何年か前、私が死んだものと信じられた際に、彼は私の一代記を書いてくれたのです。何日か前、私が発狂したと信じられた時、あなたは、あなたのこのうえもなく魅力的な文章の数行をさいて、私の精神に対する墓碑銘を書いてくださいました。そこでは、数々の晴れがましいお言葉が、本来は死後に受けるべきものの前渡しという形で、私に投げかけられておりました。どうして私にできるものでしょうか、あのような輝かしい冠を、生きながらに、頭に戴くなどということが？　こうなっては、私はつとめて謙虚をよそおわねばなりません。そして、私の遺骸に対して、あるいは私がアストルフよろしく月世界まで捜しに行き（アストルフはアリオストの『狂えるローラン』の登場人物。狂った友人の精神を捜しに月へ行く）ようやく思考の平素の座へもどしてやったと考えたく思っているあの壜のたよりない中身に対してお与えくださった、あれほどまでのお賞めの言葉を、せいぜい割引きして受け取ってくださるようにと、一般読者に懇願せずにはおれないのです。

さて、私がもうイポグリフ（鷲頭馬身で有翼の怪物。ここでは狂気の幻想を意味させている）に乗ってもおらず、人間の眼で見て、私が、俗に理性と呼ばれているものを回復したと見えている今、——一つ理性的な説明をこころみてみましょう。

次に引用するのは、あなたが、過ぐる十二月十日に、私について書いてくださった文章の一部です。

「読者諸君もすでにお判りいただけたであろうように、これは魅力に満ちた、卓抜な一個の精神なのであるが、——この精神において、時とすると、ある種の現象が生ずるのだ。それは、幸せなことに（とまあ、こう言いたいのだが）、彼本人にとっても、また彼の友人たちにとっても、真剣に悩まねばならぬようなものではない。——往々、彼が何かの仕事にはなはだしく心を奪われているようなおりに、あの本宅の狂女の異名を持つ想像力（哲学者マルブランシュの用語）が、一時的に、彼にとってはお妾さんにすぎない理性を追いやる。こうなると、カイロの阿片吸飲者やアルジェリアの大麻中毒者と甲乙のつけがたいほどの夢と幻覚とにはぐくまれたこの頭脳の中に、想像力だけがひとりとどまって、絶大な

力をふるうのであり、そしてその時には、とりとめのないその力が、彼を不可能な理論や実現しえない書物の中へ投げ込むのである。あるときは、彼は東方の王ソロモンとなり、もろもろの精を喚び起こす秘印を見つけ出して、シバの女王を待ちうける。こうした場合、どうぞ信じていただきたいものだが、それらの精たちのすばしっこさや能力、その女王の美しさや財力について、彼が友人たちにした物語にかなうほどのお伽話も千夜一夜物語もないのであり、友人たちは、それを嘆くべきなのかうらやむべきなのか、わからなくなってしまう。またあるときは、彼はクリミアの回教王、アビシニアの伯爵、エジプトの公爵、スミルナの男爵になる。また別な日には、彼は自分が気違いだと考え、どうしてそんなことになったかを物語るのだが、それがいかにも上機嫌で、じつに面白い変転を次から次へとたどっては話すものだから、皆は、自分も気違いになって、アレクサンドリアからアムモンへ通ずる焼けつくような街道にあるオアシスよりも、もっとさわやかでもっと影の濃いオアシスに満ち満ちた、奇怪な夢と幻覚との国へ連れ込んでくれるその案内人のあとについて行きたい、と思うほどである。またあるときは、憂鬱が彼の詩神となるが、その際には、できるなら一つ涙をこらえてみたまえ。というのも、ヴェルテル（ゲーテの『若きヴェルテルの悲しみ』の主人公）にせよ、ルネ（シャトーブリアンの同名の作品の主人公）にせよ、アントニー（デュマの同名の劇の主人公）にせよ、これ以上に身にしみる嘆声や、これ以上の苦しみに満ちたすすりなきや、これ以上にやさしい言葉や、これ以上に詩的な叫び声を、持ってはいなかったからである！……」

では、親愛なるデュマよ、あなたが以上のようにお述べになった現象について、これから説明してみましょう。ご存知のとおり、物語作者の中には、自分の想像力の生み出した人物に自分自身を合体させずには、何も作れないような者もあるのです。私たちの旧友であるノディエが、不幸にも大革命の時代にギロチンにかけられたときのことの次第を、どんなに確信に満ちて物語ったかは、ご存知ですね。そのため、皆は、すっかり本気になり、いったいどうやって彼は切られた首を継ぐことができたのだろうなどと、いぶかしがったほどでしたが……。

いかがでしょう、お判りいただけましょうか、物語の人をひきつける力がこういった効果を生み出しうるということ、作者が、自分の想像力の生んだ主人公の中に、いわば化身するに至り、その結果、主人公の生は作者の生となり、主人公の野心や恋情の作り出された焔に作者が身を焼かれるなどということを！　ところが、これこそが、私の身に起こったことなのです。ブリザシエとい

う仮の名で、たしかルイ十五世の時代ごろと思うのですが、世に知られていた一人の男の物語を書こうと企てていた折のことでありました。あの山師めいた男の不運を描いた伝記を、私はどこで読んだのでしたやら？　ド・ビュコワ神父の伝記のほうはみつかりましたが、このブリザシエという名のみ知られた未知の男の存在に、ほんのわずかでも歴史的な根拠をくっつけることは、私にはまったく不可能と感じられるのです！　師よ、あなたにとって、――あなたは、わが国の年代記や覚え書を、じつに巧みにもてあそぶことがおできになるので、後世は真を偽から見分けることができなくなり、あなたが自分の小説の中で一役を演じさせようとしておとりあげになった歴史上の人物をみな、あなたの創作した人物ということにしてしまうだろうと思われますが、そういうあなたにとっては、――単なる遊びでしかなかっただろうようなことが、私にとっては、一つの執念、一つの眩暈となっていたのでした。「創り出すというのは、本当は、想い出すことなのである」と、あるモラリストが言っています。自分の物語の主人公の具体的な実在の証拠を発見することができなかった私は、突然、ピタゴラスやピエール・ルルー（十九世紀の哲学者でサン＝シモン主義者）にも劣らず、魂の転生ということを熱烈に信じてしまったのです。私が、自分が生きていたと想像したあの十八世紀自体、こうした空想に満ちあふれていた時代でした。ヴォワズノンやモンクリフやクレビヨン・フィスは、この説をもとにして、たくさんの冒険物語を書きました。おぼえておいででしょうか、自分がかつてはソファであったのを想い出したある廷臣のことを？　それを聞いたシャハバハム（クレビヨン・フィス作の『ソファ』の登場人物）は、われを忘れて叫ぶのです。「何じゃと！　そなたはソファであられたと！　これはまた、じつに粋なことじゃ……。して、そなた、刺繍をされておられたかな？」

ところで、この私ですが、私はいたるところに刺繍をされていたのでした。――自分の前世のあらゆる在り方の連なりをとらえたと信じた瞬間から、私は、自分が君主であり、王であり、魔術師であり、魔神であり、神でさえあったとしても、もはや平気でした。鎖が切れ切れになった時計は、分の代わりに時を示していました。もしも私が自分の想い出の数々を、一つの傑作の中に凝集するのに成功するということがありますものなら、それはスキピオの「夢」（ローマのキケロの同名の著作に語られた宇宙論的幻想）、タッソーの「幻」（十六世紀のイタリア人詩人タッソーは、迫害をうけ狂気の幻想のうちに死んだ）、ダンテの『神曲』となるでしょうに。これよりのちは、霊感者、見神者、予言者という名声をあきらめて、私は、あなたがじつに正当にも不可能な理論、実現しえない書物とお呼びになったものだけを、あなたに差し出さねばなりません。そ

の実現しえない書物の第一章、スカロン（十七世紀のフランス作家）の『滑稽物語』（第一巻は一六五一年、第二巻は一六五七年刊、第三巻は作者の死により、別な作家たちが続篇を書いた）の続篇を成すかの如き一章を以下に掲げましょう……。これについてご判断いただきたいのです。

夫人よ、私はまだこうして私の牢獄の中におります。見かけは、相変わらず軽はずみで、相変わらず罪ありげな様子で、しかも、ああ！　かつてひとときは私のことを自分の運命（デスタン）と呼んでくれたあの美しい舞台の星（レトワール）と同音）に、相変わらず信頼を捧げているのです。レトワール（スカロンの小説における一座の花形女優）とル・デスタン（一座の男優。この名には、「一連命」の意味もある）、詩人スロカンの小説では、この男女が何と愛すべき組合せを形作っておりますことか！　けれども、今日、この二人の役をしかるべく演ずるというのは、何とむずかしいことでありましょうか。以前に、ル・マンの町の不揃いな敷石の上で、私たちをがたがた揺すぶった鈍重な二輪馬車は、幌付きの四輪馬車や、駅逓（えきてい）馬車や、その他の新発明の乗物にとって代わられてしまいました。こうなってしまっては、恋の冒険もどこにありますことやら？　女優の皆さん、いつも哀れな詩人であり、たいていの場合貧乏な詩人でもあります私たちを、あなた方と対等にし、お仲間にしてくれた、あの好ましき窮乏生活は今いずこです。あなた方は私たちを裏切り、見棄ててしまいました。しかも、私たちが思い上がっているとおこぼしになるとは！　あなた方は、派手で色好みで図々しい金持の貴族たちの言いなりになるのを手はじめとして、あげくは自分たちのばかげた乱痴気騒ぎの費用のかたに、私たちをどこかのみじめったらしい宿屋に放り出してしまったのです。そうしたわけで、この私、近来の輝かしき俳優、世に知られぬ貴公子、謎めいた恋人、廃嫡者、歓喜からの追放者、陰鬱なる美青年として、侯爵夫人たちからも議長夫人たちからも熱烈な愛を捧げられた私、ブーヴィヨン夫人の全く不似合いな寵児だった私も、田舎のへぼ詩人で道化者のあの哀れなラゴタン（一座と行を共にし、失敗ばかりする男）も同然のあつかいを受けたのでした！……せっかくの美貌も、大きな育楽でかたなしにされていては、なおさら確実に私を破滅させるための役にしか立ちませんでした。ラ・ランキュース（一座の男優で冷笑的な性格。「怨恨」の意味がある）の弁舌に籠絡（ろうらく）された宿屋の主人は、勉学のためこの地へ派遣され、ブリザシエの筆名でヨーロッパのあらゆるキリスト教国に有利な知己を得ている、クリミアの大守の実の息子を、借金のかたとしてあずかっておくことで満足したのでした。でも、もし、あの卑劣漢、あの時勢おくれの策師めが、私に、何枚かの古いルイ金貨か、何枚かのカロリュス銅貨、それともせめて金メッキ側の貧弱な時計の一つも置いていってくれていたなら、まだしも、私を

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongl

告発した連中にあるいは尊敬の念を起こさせることもでき、こうしたばかげた策略の不愉快な結末を避けることだってできたでありましょうに。さらに有難いことに、あなた方は、私に、着るものといっては、みすぼらしい羊羹色のぼろ外套と、黒と青との縞のある上衣と、いつまで保つかも疑わしい股引だけしか置いていってくれませんでした。そのために、あなた方の出発のあとで私のトランクを持ち上げてみたとき、不安にかられた宿屋の主人は、つらい真相の一部をかぎつけ、私のところへやって来て、私のことを密輸の貴公子だ、と、あけすけに言いはなちました。この言葉を耳にするや、私は自分の剣にとびつこうとしました。だが、剣はラ・ランキューヌが私から取り上げてしまっていたのです。自分を裏切った忘恩の女の眼前で、私がわれとわが心臓を刺したりするのを防がねばならぬ、という口実で！　そんな仮定は無駄ごとでした。ええ、ラ・ランキューヌめ！　芝居の剣で自分の心臓を刺す者はない。私は、料理人ヴァテール（大コンデ公の料理頭。ルイ十四世に晩餐を供した時、鮮魚がなく、彼は不名誉に思って剣で自殺した）のまねはしないのです。自分が悲劇の主人公であるときに、小説の主人公たちのパロディを演じてみる気にはなりません。それに、そうした死にざまが、多少なりとも気高く演じられることなどありえないという点については、私の仲間を一人のこらず証人に立てましょう。地面に剣をさして、両腕を拡げてその上に身を投げることができるのは、私もよく知っています。だが、私たちがいまいるのは床を組み木細工で張りつめた室内で、ここには、この寒い季節にもかかわらず、敷物さえないのです。それでも、窓は、全く悲劇的な絶望に陥ったとき、そこから自由に身を投げて一生にけりをつけることができるように、通りの上に十分に広く、十分に高く開いています。しかし……、しかし、あなたに何度となく申しましたように、私は俳優であるとはいえ、信仰をもっているのです。

あなたは覚えていらっしゃるでしょうか、たまたま三流か四流のある町に来かかった私たちが、とかくないがしろにされがちな昔のフランス悲劇への敬意をひろめようという気紛れを起こしたとき、私がどんな具合にアシール（ラシーヌ作『イフィジェニー』の主要人物、ギリシア神話のアキレウス）を演じたか、を？　真紅のたてがみの付いた金色の兜を戴き、きらめく鎧を着、空色のマントをまとった私は、気高くもまた力強かったじゃありませんか？　そして、あの時、涙にくれている哀れなイフィジェニーを少しでも早く刃に掛ける誉れを神官のカルカスと競っている、アガメムノン（トロイ戦争のギリシア側の総大将。イフィジェニーの父）のような卑怯な父親を目にするのは、何と痛ましいことでありましたろう！　私は、その有無をいわさぬ残酷な話の運びのまっただ中へ、稲妻のようにとび込んだものでした。そして、常に、一つの義務の、

一つの神の、一民族の復讐の、一家族の名誉もしくは利益のための犠牲にされている、母親たちには希望を、哀れな娘たちには勇気を、私は与えてやるのでした！……というのも、これこそ人間の結婚についての永劫不変の物語なのだと、いたるところでだれにも良くわかるのでしたから。いつになっても父親は野心のために娘を引き渡し、いつになっても母親は欲にかられて娘を売ることでしょう。もっとも、娘の恋人は、あの清廉なアシール、軍人にしては少々雄弁家にすぎますものの、あれほど美しく、あれほど見事に武装し、あれほど粋で、あれほどすさまじいアシールでは、必ずしもありますまい！　さて、この私は、これほどすじみちの見えすいた問題をめぐって、私の権利を容易に納得した観客を前にしつつ、くだくだしい長ぜりふをしゃべらねばならないことに、時とすると腹が立つのでした。さっさとけりをつけるために、王者たちの王アガメムノンの馬鹿な宮廷の連中を一人のこらず、居眠りをしている端役たちの人垣もろとも、撫で切りにしてみたい気になりました！　そうすれば公衆は非常に喜んだことでしょう。けれども、彼らも、ついには、これでは芝居があまりに短すぎると気付き、姫君や恋人や女王が苦しむのを眺め、彼らが泣いたり、憤激したり、神官や君主の古い権威に対して声を合わせて悪口を滝のようにくりひろげたりするのを見るための時間が必要なのだと思い直すにいたるでありましょう。そうしたすべては、優に五つの幕と、二時間の期待にあたいするのです。そして、そうでなければ、公衆は満足しないことでしょう。公衆には、ギリシアの王位に堂々と座を占め、その前ではアシールその人でさえも口先で憤慨することぐらいしかできない唯一無二の家柄の光輝に対する復讐が必要なのです。公衆は知らねばなりません、この緋衣の下にある悲惨のすべてを、そしてまた、あらがいがたい威厳のすべてをも！　イフィジェニーの、この世で最も美しい眼からまばゆいばかりの胸へと落ちる涙は、彼女の美や、しとやかさや、王女の服の輝きにも劣らず群衆を酔わせるのです！　自分がまだろくにこの世に生きてもいないことを思い出させながら命乞いをするあのような美しい声。父親の甘さにやさしくうったえるため、涙をこらえたその眼に浮かべたほほ笑み、その生まれてはじめての媚態は、ああ！　恋人に向けられることはないでありましょう！……おお！　何物かをそこから汲みとろうとして、一人一人が何と注意を集中して見入っていることか！　彼女を殺すって？　彼女を？　誰がそんなことを思いつくのか？　大いなる神々だと！　おそらくは誰一人として？……ところが事は逆なのでした。だれもかれもが、彼女は、ただ一人の男のために生きるよりも、むしろ万人のために死ぬべきであると、す

でに考えていました。みな、アシールのことを、美男すぎる、偉大すぎる、堂々としすぎている、と思ったのです！　もう一人の女、あのレダの娘（ヘレネーのこと）が、先ごろ、アジアの逸楽的な海岸にある牧人国の王子（トロイのパリスのこと）に奪い去られたように、イフィジェニーもまた、このテッサリアの禿鷹（アキレウスのこと）めに奪われてしまうのだろうか？　それこそギリシア人すべてにとっての問題であると共に、これら主人公たちの役柄において私たちを評価する観客たちにとっての問題でもあります！　で、この私は、こうした堂々たる勝利の恋人役のどれかを演じるとき、女たちの感嘆をさそった分だけ、男たちからは憎まれるのを感じたものでした。私は、あのような不朽の詩句をただみじめたらしく単調に口にするだけのために育てられた、心の冷たい舞台裏の王女の代わりに、男たちが嫉妬深い神々と争うにいかにもふさわしい、優雅と愛と純潔とにきらめく真珠、正真正銘のギリシアの娘をこそ、守りぬき、その心を奪い、保護しつづけなければならなかったのでした！　それは単にイフィジェニーだけのことだったでしょうか？　いいえ、それはモニームであり、ジュニーであり、ベレニス（それぞれラシーヌの劇『ミトリダート』『ブリタニキュス』『ベレニス』のヒロイン）でした。シャンメレ嬢（ラシーヌの恋人だった名女優）の美しい空色の眼や、サン＝シール（マントノン夫人の主宰した女子学院。ここでラシーヌの『エステル』『アタリー』が上演された）の高貴な処女たちの讃嘆にあたいする優美さから、霊感を得て創り出された、すべての女主人公たちがそうだったのです！　ああ、オーレリー、私たちの仲間、私たちの妹よ！　あの陶酔と誇りとの時を、君自身でも惜しいとは少しも思わなかったろうか？　私が君のために悩み、戦い、あるいは涙するのを見て、冷淡な星よ！　そのため一瞬は私を愛したのではなかったか！　今日、世間が君の身にまとわせている新しい光輝のほうが、私たちが二人して得た数々の勝利の輝かしいイメージよりもまさっているというのだろうか？　毎晩、人々は言いあったものです。「これまで私たちが喝采を送って来たどんな女優にもまさるこの女優は、いったい何者なのか？　私たちは思い違いをしているのじゃないかしら？　彼女は、見かけどおりに、若く、フレッシュで、貞淑なのだろうか？　彼女の白っぽく光る金髪の間できらきらしているのは本物の真珠や上等のオパールかしら？　そしてあのレースのヴェールは、本当にあの貧しい女の子の正当な持物だろうか？　あんな錦織りの繻子や、大きなひだのあるビロードや、フラン天や、白貂皮の衣裳をつけてはずかしくないのかしら？　ああいうのはどれもこれも、古くさい趣味なのだよ、年齢よりも大人に見られたいっていう気まぐれのあらわれさね」そんな風に話しながらも、母親たちは、自分たちの美しい想い出を呼びさましてくれる過ぎた世紀の化粧や服飾に対する変わ

らぬ好みの品々に、うっとりと見入るのでした。若い婦人たちは、ねたんだり、とやかく言ったり、あるいはまた不承不承に讃めたりしていました。しかし、私のほうは、彼女のかたわらにいてもめまいを感じたりせず、私たちの役柄が必要とするだけ自分の眼を彼女の眼にそそぐことができるのですから、しょっちゅう彼女を見ていたかったのでした。こうしたわけで、アシールの役は私のお得意の役だったのです。しかし、その他の役を選ぶ段になって、しばしば困惑したのも、このためです！好き勝手にシチュエーションを変えたり、自分の敬意や愛情のために天才の思想さえも犠牲にしたりすることが、敢えてできないというのは何と残念なことか！　ブリタニキュスだとか、バジャゼ（いずれも、ラシーヌの同名の劇の主人公）だとか、ああいった、心の自由のない、臆病な恋人たちは、私には不似合いでした。若きローマ皇帝の緋の衣のほうが、もっとずっと私の心をひきつけたのです！　しかし、次に出会わすのが、冷たい裏切り行為ばかりというのでは残念な話です！　え、何ですと！　ネロン（ラシーヌの劇『ブリタニキュス』の主要人物の一人）がいたんですって、ローマであんなに賞めそやされたネロンが？　そのただひとつの渇望はみなを喜ばせるということだった、あの見事な闘技士の、あの踊り達者の、あの熱烈な詩人の、ネロンが？　ああいうのは、歴史が彼をそんな風に仕立て上げ、詩人たちがその歴史にしたがって夢想をたくましゅうした結果なのです！　おお！　表現するために、彼の激情を与えてもらいたい。しかし、彼の権力は、引き受けるのをごめんこうむりたい気がします。ネロンよ！　私がそなたを理解したのは、ああ！　ラシーヌによってではなく、そなたの名を敢えて借りて舞台に出た時に引きさかれた私の心によってだった！　そうだ、そなたは一個の神であったのだ、ローマを焼こうとしたそなた、そしてローマがそなたを侮辱した以上、おそらくはその権利があったそなたは！……

あの口笛、彼女の眼の前で、彼女のそばで、彼女が原因の、あの野次の口笛！　彼女は自分のせいにしたが――私の過失からだったあの口笛（どうか判ってください！）。それでも、あなた方は、雷霆（らいてい）をわが手にしている者がどうするかをおたずねになるのでしょうね！……おお！　友人たちよ、よく聞いてください！　私は、あなた方の板べらと布切れでできた舞台の上で、あなた方の安びかの芝居の中で、一瞬、心にうかべたのです、真実であり、偉大であり、私をついに不滅とするであろう一つの考えを！　それは、私が今もこうして苦しんでいる罰にあたいした、侮辱には侮辱で答えるというやり方ではなく、また、俗悪な全部の観客を挑発して、舞台に殺到させ、卑劣にも私を打ち殺すようにするのでもなく……、私が一瞬心にうかべたのは、崇高な考え、ローマ

皇帝その人にふさわしい考え、今度という今度は、誰一人として、大ラシーヌの下風に置こうなどとはしないであろう考え、つまりは、劇場と、観客と、そしてあなた方みんな！　を燃やし、その中からただ一人、役柄に従って、それとも少なくともビュルス（ネロンの後見役だった人物で『ブリタニキュス』にも登場する）の古典的物語に従って、半裸で、髪を乱している彼女だけを、火焔をかいくぐって連れ去るという壮厳な考えだったのです。そして、そうなれば、その瞬間から死刑台まで、死刑台からさらに永遠の中までも、何ものといえども私から彼女を奪うことができないのは、確実でありました！　ああ、熱にうかされた私の夜々と、涙にひたされた私の日々の、数々の悔恨！　え、何ですって！　やればできたのに、しようとしなかったからだと言うんですか！　おやおや、あなた方は、まだ私を侮辱するのですね、私が怖れたというより、私が憐れに思ったおかげで、いのちが助かったくせに。そんな連中はみんな燃やしてしまうことだって、私にはできたのだ！　考えてもごらんなさい。P……の劇場は出口が一つしかないのです。私たちの分は、裏の小路に面していました。ところが、あなた方みんなのいた楽屋は、舞台の反対側にあるのです。この私にとって、幕に火を放つためには、掛けランプの一つをはずしさえすればよく、それも見とがめられる危険もなしにやれたのでした。見張人からは私の姿は見えませんでしたし、私は一人きりで、すぐまた舞台に出て演ずるために、ブリタニキュスとジュニーとの気のぬけたやりとりに耳を傾けていたからです。この出を待っている間じゅう、私は自分自身と闘ったのでした。再び舞台へもどるとき、私は拾った片方の手袋を指でくしゃくしゃにしてしまいました。すっかりローマ皇帝の心になりきって私が感じ取ったあの侮辱に対して、ローマ皇帝その人よりも気高くしかえしをしてやろうと、私は待ち構えていたのですが……どうでしょう！　あの卑怯者どもは二度とやじろうとはしなかったのです。恐れ気もない私の眼は、連中を縮み上がらせました。そして、ジュニーがあんなことをしでかした時、私は、彼女をではないにせよ、観客たちを、許そうとしていたのです。……ああ、不滅の神々よ！……聞いてください。私に、好きなように話させておいてください！……ええ、そうなのです。あの晩以来、私は狂おしくも自分がローマ人であり、皇帝であると信じるようになったのです。私の役が、私自身と一体となりました。ネロンの寛衣は、ちょうどケンタウロス（ギリシア神話の半人半馬）の肌着が瀕死のヘーラクレースを焔で焼きつくしたように、私の四肢にぴったり貼り付いて、じりじりと焼くのでした。いかに遠い昔に消え去った民族や時代のものであるにせよ、聖なる物をもてあそぶのは、もうよしましょう。ローマの神々

の灰の下には、おそらく、今なおいくらかの焔が残っているのですから！……友人たちよ！　何よりもよくわかってほしいのです、私にとっては、型にはまったせりふを冷静に再現することなど問題でなく、すべてがなまなましく生きており、三つの心が平等なチャンスを与えられてたたかっていて、円型闘技場でと同じように、いままさに流れようとしているのが、おそらく、本当の血である一つのシーン、そのシーンこそが問題だったという点を！　そして、観客たちはそれをよく知っていました。彼ら、この小さな都市の観客たちは、私たちの舞台裏のありとあらゆる事件について、じつによく通じていたのでした。もし私が唯一の恋人を裏切る気になったとしたら、その大部分が私を愛してくれただろう女たち！　その一人の女ゆえに、みんな私を嫉妬していた男たち。そしてそれからもう一人、例のうってつけのブリタニキュス役者、私の前や彼女の前ではどぎまぎしてふるえている哀れな恋の男。だが、この男こそ、最後に来るものがあらゆる有利さとあらゆる光栄を持つ、この恐るべきゲームで、私を打ち負かすことになっていたのです！……ああ！　この新米の恋人は、自分のやりようを心得ていました。……もっとも、彼は何も心配することはなかったのです。私は、あまりに公明正大だったので、自分と同じように恋をしているだれかに対して罪なことなどできなかったからで、この点、私は、詩人ラシーヌが夢みた空想的な怪物とは大いにことなっていました。私はためらうことなくローマを焼くでしょうが、ジュニーを救う時には、わが兄弟のブリタニキュスをも救うでありましょう。

　そうなのだ、わが兄弟よ、そうだとも、私と同じに、芸術と空想との哀れな子供よ、おまえは彼女を得たのだ。ただただ私と彼女を争うことによって、おまえは彼女にふさわしくなれたのだ。全能であり、公正であり、私の夢にとって、人生にとって、女神である彼女の、選択や気まぐれを犯そうとして、私が、自分の年齢や、力や、健康が私に再びもたらした誇りの気持を乱用したりしないように、天は私を守ってくれている。……ただ、私は、私の不幸がおまえには何の得にもならないのではないか、私だけが失ったつもりの女が、町の色男どもの手で私たち二人から奪われるのではないか、と、ずっとあやぶんでいたのだった。

　ラ・カヴェルヌ（一座の老け役女優。「洞穴」の意味の名）から受けとったばかりの手紙は、この点について、私をすっかり安心させました。彼女は、《私には向いておらず、私が少しも必要としていない芸術……》を諦めるように、と、私に忠告してくれています。ああ！　この冗談はてきびしい。芸術ではないにしても、少なくともそれが産み出す数々の

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongl